



Title	弥生～古墳時代における掘立柱建物と「特定区画/ 居館」の性格の変遷
Author(s)	三好, 玄
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 105-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

弥生～古墳時代における掘立柱建物と 「特定区画 / 居館」の性格の変遷

三 好 玄

はじめに

首長居館あるいは豪族居館とよばれる遺跡については、おもに 1980 年代以降、多くの研究がなされてきた。用語とそれが指し示す内容について様々な議論があることをふまえつつ、その前身と目される特定区画（寺沢 1998a）とあわせ、これらを「特定区画 / 居館」と総称すると、青柳泰介による研究史の整理のとおり（青柳 2012）、この種の遺跡の認定基準は、政治、経済、軍事、祭儀（辰巳 2006）など様々な観点から議論されており、論者によって必ずしも一致しない。また近年では群馬県三ツ寺 I 遺跡のように区画施設内に様々な施設を取り込んだ「集中型」以外に、奈良県南郷遺跡群のように広い範囲に各種の拠点が配置された「分散型」の存在が指摘される状況となっている（辰巳 2004、青柳 2012）。さらに一部の「特定区画 / 居館」を祭儀的あるいは経済的な役割を中心とする施設として捉えなおそうという動きも活発化しつつある（飯塚 2012、米川 2015、日高 2020、田中 2024 など）。

こうした点をふまえると、問題となる遺構が首長の居所であったのか否かを吟味することが重要であり、そのためには、建物の性格の評価に基づく施設構成の分析が必要と考えられる。本稿では、掘立柱建物を中心とする建物遺構の検討により、この問題にアプローチしてみたい。

1. 弥生～古墳時代の掘立柱建物の分類

建物遺構の性格 弥生～古墳時代の建物遺構は、竪穴建物、掘立柱建物、平地建物に分類することが一般的である。竪穴建物については、火処をもつ例が多く、主に住居と考えられ、特に規模が大きいものについては、首長のすまいとみなされる場合がある（青柳 2013）。壁立ち構造の平地建物については、近畿地方での検出例は少ないが、集落生活面が洪水層で覆われた状態で検出された大阪府八尾南遺跡においても、他の建物に対してごく少数であることから、ひとまず近畿地方の集落景観の復元に大きな影響を及ぼすものではないと考えておこう。

これに対し、掘立柱建物の性格の評価は大きな問題をはらんでいる。同じ建物遺構をめぐっても建築学者や考古学者が異なる復元案を想定し、意見の一致を見ないことがあるためである。

今日の掘立柱建物にかんする研究は、宮本長二郎による全国的な事例の集成・整理によって基礎づけられたものといえ（宮本 1991・1996）、その後、考古学あるいは建築学を基盤とする研究者が様々な分類を行いつつ検討を進めてきた（岩崎 1991、植木 1991・2013、梅本 1997、見須 1997a・1997b、岸本 1998、武末 1998、青柳 2003、森岡 2006、吉識 2008、李 2008、高田 2010、高橋 2018、寺沢 2018 など）。とりわけ近畿地方の弥生時代にかんしては、独立棟持柱付建物に注目した分析が多い点に特色がある（広瀬 1998、設楽 2009、三木 2011、山下 2015、禰亘田 2019・2024）。しかしながら本稿の分析を下記の問題意識に基づくものとするならば、既往の分類のいずれかをそのまま適用して議論を進めることは難しい。

- ・弥生時代～古墳時代の近畿地方を中心に、大小の掘立柱建物の総体を扱う
- ・独立棟持柱付建物を特別視することなく、全体の構造を優先した体系的分析を行う
- ・掘立柱建物の機能と密接にかかわる属性を中心にすえる

掘立柱建物の構造 そこでここでは、建物の構造、特に床に注目した分類を行ってみたい。床の有無は、建物復元にかんする議論のもっとも大きな論点の一つであり、束柱の有無と床を支える大引の長さが問題となる。たとえば、大阪府池上曽根遺跡大形建物 1 の場合、当初、宮本によって、7 m の梁行に貫で大引を渡した高床式の案が示されたが、浅川滋男はこれに異を唱え、吹き放ちの土間式に復元すべきであると主張した（浅川 1998a、乾 2001・2022）。その論拠は多岐にわたるが、束柱なしに大引を支持することが可能な距離の限界を、宮本案では大きくこえるということが主な理由の 1 つである（浅川 1998b）。

建築分野での議論について、意見をさしはさむことはためらわれるが、既往の調査成果の吟味には一定の意義があると考え、寺沢薫の集成（寺沢 2018）に基づき、弥生時代の束柱を待つ建物、すなわち総柱建物の梁行方向の柱間距離を確認してみた。その結果は図 1 左⁽¹⁾のとおりであり、大半が 3.5 m 以下でわずかにこれを越えるものがある。さらに、若林弘子によって調査されたタイ北部～中国南部の民族の高床建物（若林 1986）の例を見ると、図 1 中・右⁽²⁾の

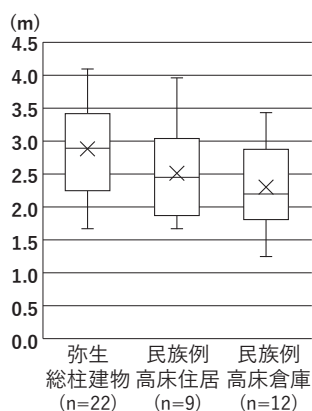
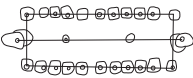
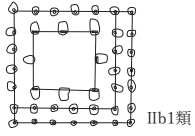
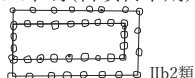


図 1 高床建物の梁行柱間距離

とおり図 1 左よりやや小さい程度の様相となる。これらが大引を渡すスパンの限界を示すものとすれば、余裕をみて 4 m 前後を土間式と高床式の区分の目安とすることができるだろう。以下では、この数値と建物内部の柱の有無等を考えあわせることにより、掘立柱建物を分類してみたい。

掘立柱建物の分類 建物内部に束柱をもたないもの（Ⅰ・Ⅱ類）と、建物内部に柱をもついわゆる総柱建物（Ⅲ類）に大別した上で、次の通りそれぞれを細分する（図 2）。

前者のうち、梁行 1～2 間をⅠ類、梁行 3 間以上をⅡ類とし、Ⅰ類のうち、梁行の柱間距離 4 m 未満のものをⅠa 類と

束柱	梁行1～2間		梁行3間以上	
	梁行柱間距離4m未満	梁行柱間距離4m以上	身舎・庇構造なし	身舎・庇構造あり
なし	Ⅰa類 ・氏の松遺跡(弥生前期)  	Ⅰb類 ・唐古・鍵(弥生中期) ・武庫庄(弥生中期) ・池上曾根(弥生中期)  ・伊勢(弥生後期) ・秋津(古墳前期)	Ⅱa類 ・久保園(弥生中期) ・妻木晩田(弥生後期) ・津堂(古墳中期) ・大園(古墳中期) 	Ⅱb類 ・中海道(古墳前期) ・極楽寺ヒビキ(古墳中期)  ・八木嶋(古墳終末期) 
あり	Ⅲa類 ・吉武高木(弥生中期) ・平塚川添(弥生後期) ・阿倍野筋(弥生終末期)  ・長原(古墳後期)		Ⅲb類 ・吉野ヶ里(弥生後期) ・伊勢(弥生後期)  ・樽見四反地(古墳前期)	Ⅲc類 ・鳴滝(古墳中期) ・法円坂(古墳中期) 

*下線は近畿地方以外の事例

図2 弥生時代～古墳時代における掘立柱建物の分類と代表的事例

して小型の高床式あるいは土間式建物と考える。4m以上のものをⅠb類とする。大半がいわゆる長棟建物（高田 2010）で、大型のものには独立棟持柱や屋内棟持柱が伴う。土間式となるものとする⁽³⁾。

Ⅱ類は、梁行3間以上の多梁間建物で、身舎・庇構造（植木 2013）をもたないものをⅡa類、これをもつものをⅡb類とする。さらにⅡb類で身舎の梁間が2間のものをⅡb1類、3間以上のものをⅡb2類に細分する。一般的に、Ⅱb類は高床式とされることが多いが、身舎の梁行は、大引を渡すスパンとしては長大である。このため、土間式となる可能性が高いが、遺構面の削平によって本来存在した柱が消滅したと考えれば（岡田 1991）、低床の揚床式（山中 2007）に復元することも可能である⁽⁴⁾。

次に、後者すなわち建物内部に柱をもつものをⅢ類とし、梁行2間のものをⅢa類、梁行3間以上で身舎・庇構造をもたないものをⅢb類、梁行3間以上で身舎・庇構造をもつものをⅢc類とする。Ⅲ類は高床式と考えられ、倉庫を基本としつつ、一部に特殊な用途も想定される。

2. 掘立柱建物の変遷と「特定区画／居館」の性格

前項で分類した掘立柱建物の弥生時代から古墳時代にかけての変遷を、近畿地方を中心に各時期の「特定区画／居館」の性格とあわせて概観してみたい。事例の評価にあたっては、検出された建物（群）を居住の痕跡とみなしうるか否かという点が重要な問題となるが、遺構のみ

からの解釈には限界があるため、文献が利用できる奈良時代の様相を参照しておく、小規模宅地でも、主屋に加え、厨や倉庫等の付属屋といった大小様々な建物の組み合わせがみられる(家原 2018)。これをふまえ、以下では濠、溝、柵などの区画施設の内部に設けられた建物の構成に注目しつつ、時期ごとの様相をみていくこととしたい(図 3)。

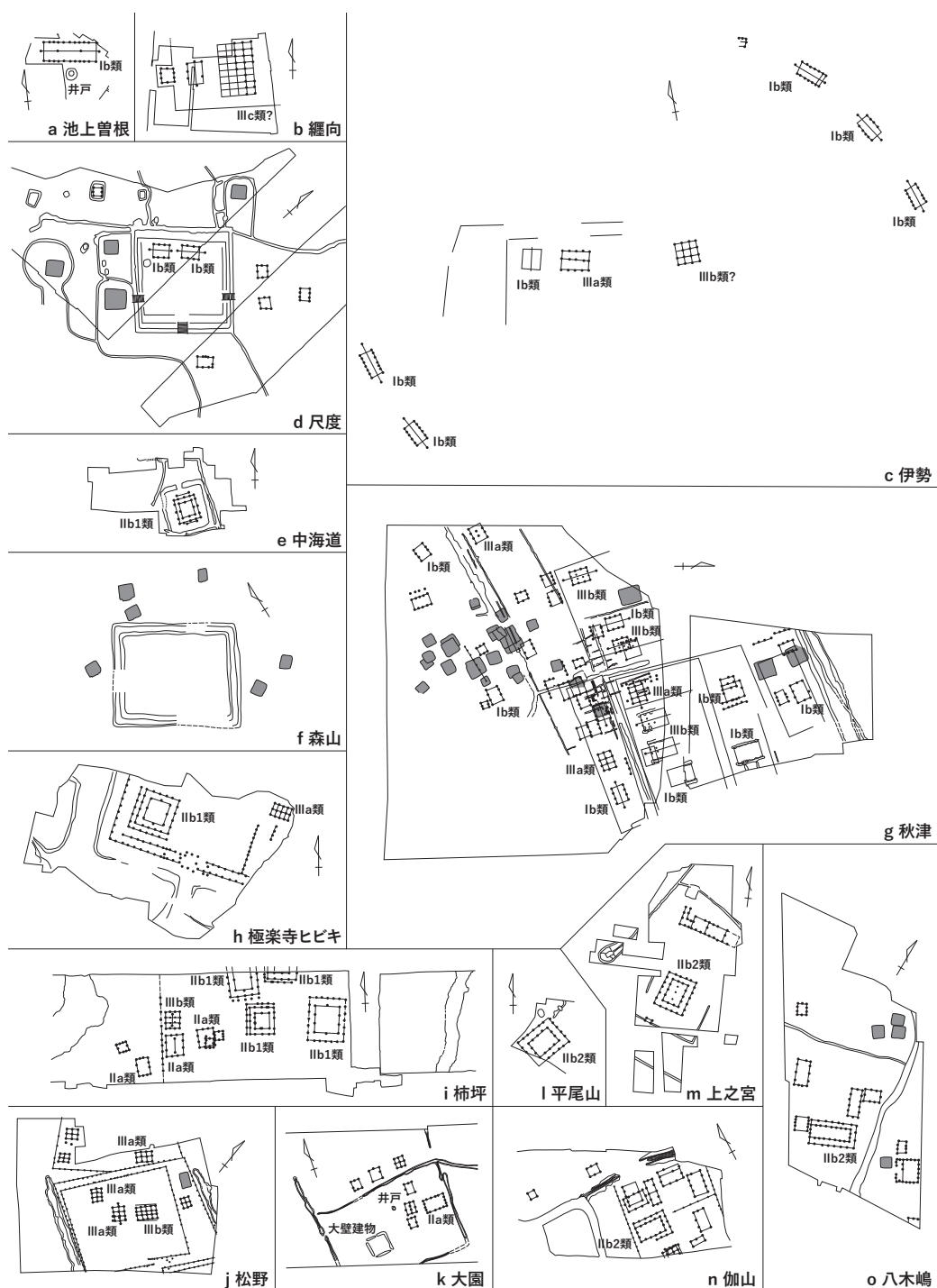
弥生時代前期～後期 I a 類が弥生時代前期以降、多くの遺跡で検出されており、倉庫等として利用されたものと考えられるが、立地によっては住居にも用いられた可能性がある(大木 2007)。弥生時代中期前葉以降も全体としては I a 類が中心となるが、奈良県唐古・鍵遺跡(73 次調査)では I b 類(2×5 以上間、独立棟持柱付)^⑤が出現している。続く中期中葉に属する I b 類としては唐古・鍵遺跡(93 次調査、2×6 間)や大阪府上の山遺跡(1×5 間、独立棟持柱付)の例が知られ、中期後葉には池上曽根遺跡(1×10 間、独立棟持柱付)(図 3-a)をはじめ、大規模な建物がさらに増加する。これらは、土間式の開放的な建物が基本的に単独で営まれたものであり、住居というより集会所や共同作業場といった機能を含む公的な性格を想定すべきであろう(浅川 1998b)。

その後、中期末から後期初頭には大規模集落の多くが廃絶し、大型建物も見当たらない状況となるが、後期中葉以降、近江および山城において大型掘立柱建物が営まれている。滋賀県伊勢遺跡(図 3-c)では、方形区画内およびこれを取り巻く円周上において多数の I b 類等が検出され、近畿地方での初現例となる III b 類(3×3 間)も伴っている。一帯は遺物の出土も少なく、居住施設というよりも大規模な祭儀センターとして理解することが妥当であろう。

弥生時代終末期 終末期には、大阪府阿倍野筋遺跡例(2×4 以上間)の III a 類のように新たな型式が出現するほか、特殊な例として奈良県纏向遺跡(図 3-b)において、束柱をもつ巨大な建物(2 以上×8 間)が検出されている。III b 類とみるか III c 類とみるかで、建築史学者の間でも意見が分かれているが(黒田 2012、鳥取環境大 2010)、報告者は、これを含む複数の建物の全体の構成から、「ヤマト王権初期の大王宮に相応しい」と評価している(橋本 2013)。

一方、大阪府尺度遺跡(図 3-d)では、約 35 m 四方の「特定区画 / 居館」が検出され内部には I b 類が 2 棟並ぶ形で 3 時期重複した状況(最大の建物 C は 2×4 間)が検出されている。この方形区画の南西に接する形で大型の堅穴建物が検出されており、報告者は方形区画を祭儀施設、大型堅穴建物を首長の住居にあたるものとみて、「首長は、自らの住居を方形区画の中に取り込むには至ら」なかったという解釈を示している(三宮 1999)。

古墳時代前期 前期初頭の京都府中海道遺跡(図 3-e)では、約 15 m 四方の「特定区画 / 居館」内で最古例の II b1 類(身舎 2×2 間、四面庇)が検出されており、祭儀施設と考えられている(梅本 1997)。また、前期後半の奈良県秋津遺跡(図 3-g)では、約 100×120 m の範囲に 7 基の方形区画がみつき、その内部から 44 棟の掘立柱建物が検出されている。主体となるのは I b 類であるが、特に大型のものは、独立棟持柱をもつ長棟建物に近い形態でありながら、束



* 網掛は堅穴建物を示す。

* 下記および各遺跡の報告文献に掲載された図から作成。

c：近藤 広 2006『近江南部における弥生集落と大型建物』『弥生の大型建物とその展開』サンライズ出版、滋賀

f・o：坂 靖 1998『近畿地方』『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』東日本埋蔵文化財研究会群馬実行委員会・群馬県考古学研究所、群馬

図3 弥生時代～古墳時代における掘立柱建物と「特定区画／居館」

柱を付加したⅢb類(3×3以上間、独立棟持柱付、布掘り柱掘形)となる。詳細は不明ながら、総体として居住施設というよりも大規模祭儀施設とする見解(米川2018)が妥当と思われる。その他、奈良県菅原東遺跡や京都府森山遺跡(図3-f)などでも「特定区画/居館」が検出されているが、建物の構成は不明瞭であり、少なくとも居住施設とは考えにくい。

古墳時代中期 中期には、梁行2間・桁行2間の身舎の周りに庇を巡らせた四面庇のⅡb1類が各地で検出されるようになり、Ⅰb類にかわって大型建物の主流となる。また、高床のⅢb・Ⅲc類にも大規模なものが出現し、巨大な倉庫として用いられたものと考えられる。中小規模の建物についてもⅠa類が減少する一方でⅢa類が急増しており、高床倉庫の型式の交代を示すものと考えられている(宮本1991・1996)。このように大小の建物の型式が大きく変化するこの時期は、弥生時代から古墳時代にかけての変遷の中で最大の画期となる。

「特定区画/居館」にかんしては、中期前半の奈良県南郷遺跡群において、東西1.4×南北1.7kmという広い範囲に各種の拠点配置された状況が明らかとなり、分散型居館の典型例とされている。本遺跡群中の極楽寺ヒビキ遺跡(図3-h)で大型のⅡb1類(身舎2×2間、四面庇・二面孫庇)⁽⁶⁾、南郷井戸大田台遺跡でⅢb類(4×4間)が検出されており、前者は祭儀施設、後者は大規模な倉庫に比定されるが(青柳2013)、首長の居住施設自体は未発見とされている(坂2009)。同じく中期前半の兵庫県柿坪遺跡(図3-i)では、柵と溝による区画の内部に掘立柱建物群が営まれている。複数時期の変遷が想定され、Ⅱb1類(身舎2×3間、四面庇など)とⅠa類やⅢb類からなる「政祭儀礼の場」と評価されているが(吉識2008)、大小の建物の組み合わせからは居住の可能性も考慮すべきかと思われる。

中期後半には、兵庫県松野遺跡(図3-j)において約50×40mの「特定区画/居館」が検出されており、内部にはⅢa類(2×4間、独立棟持柱付)やⅢb類(3×3間、一面庇)などの建物が設けられていた。近隣地点の調査ではⅡa類や竪穴建物が複数みついているのに対し、区画内の掘立柱建物はいずれも総柱式であり、祭儀施設の可能性が高いと考えられている(口野編2001)。これに対し、約50×30mの区画内に掘立柱建物4棟、大壁建物1棟や井戸が検出された大阪府大園遺跡(図3-k)の場合、Ⅱa類(4×5間)やⅢa類(2×2間)など、大小様々な建物が組み合わせられており、エリート層の居住施設と考えられる。

古墳時代後期以降 後期前半の事例はきわめて少ないが、後期後半～終末期にかけて、奈良県上之宮遺跡、大阪府伽山遺跡、京都府八木嶋遺跡(図3-m～o)等、区画内に掘立柱建物を多数配置した新しいタイプの「特定区画/居館」が各地で出現する。大型建物についても、奈良県阿部丘陵遺跡(身舎3×5間、四面庇・二面孫庇)のように身舎梁間3間構造(植木2013)をもつⅡb2類があらわれ、Ⅱb1類にかわって主流となっていく。これを中心に大小多数の建物が組み合わせられた多くの建物群が、エリート層の居宅として評価されている(広瀬1989など)。奈良県平尾山遺跡(身舎3×4間、四面庇)(図3-l)のように大型建物が単

独で営まれた祭儀施設的な例もわずかにあるが、居住施設と考えられるものの割合が高くなる。**建物遺構からみた「特定区画／居館」の実態** 以上、近畿地方における掘立柱建物の構成および「特定区画／居館」の性格の変化をみてきた。改めてその結果をまとめておくと、弥生時代から古墳時代前期までの「特定区画／居館」は祭儀施設としての性格が濃厚であるのに対し、エリート層の居住施設といえるものは王権中枢など、ごく一部にみられるのみである。そのような特殊例以外で、積極的に居住施設と考えられるものは、古墳時代中期に出現し、後期後半以降に急速に増加したのち、古代に各地で営まれた豪族居宅へと展開していく。

おわりに

本稿では、弥生時代～古墳時代の掘立柱建物の構造に注目した分類を行ったうえで、「特定区画／居館」の建物構成の変遷を整理し、それらが祭儀的な性格をもつものから、古墳時代中期を画期としてエリート層の居住施設へと変化していくことを確認した。この変化の歴史的意義の評価にあたっては、九州や関東といった他地域の動向や、「居館」が居住施設でないとした時期のエリート層の存在形態など、検討すべき事項が多く残っている。今後の課題としたい。

謝 辞

福永伸哉先生には、大学院時代から大阪府奉職後の現在まで多大なご指導・ご支援を賜りました。特に百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録は、先生のご尽力なしには実現しえなかったものと思っております。改めて心より御礼申し上げますとともに、ますますのご活躍とご健康を祈念いたします。

また、本稿作成にあたって下記の方々にご支援、ご協力いただきました。記して感謝申し上げます。青柳泰介、秋山浩三、植木久、禰亘田佳男、萩原安寿、原田昌浩、三木 弘（五十音順、敬称略）

註

- (1) 寺沢 2018 表 1（pp. 56-73）所収の総柱建物の柱間距離を集計。
- (2) 若林 1986 掲載図面からラワ族、カレン族、アカ族、ハニ族、ラフ族、リス族、タイ族、ラフ・セレー族、ラフ・ニー族の高床住居および高床倉庫の柱間距離を集計。
- (3) まれに認められる布掘柱掘形をもつもの（楠 1995、高橋 2018）については、地中梁の設置などによって構造の安定化が図られた高床式建物の可能性がある（高田 2010、浅川ほか 2018）。
- (4) 揚床式の建物は古代官衙などでは一般的に認められるものであり（山中 2007）、古墳時代でも火山灰に覆われた群馬県金井下新田遺跡で良好な事例が報告されている（小島 2021）。
- (5) 一般的には総柱建物（本稿のⅢ類）という評価がなされているが、建物内部の柱列は側柱の位置と一致しないことから、変則的な形ではあるものの、これらを棟持柱とみなして I b 類と考える。93 次調査の大型建物も同様。

- (6) 本建物に関して、黒田龍二と浅川滋男の間で復元案に相違があるが(黒田 2006、鳥取環境大 2010)、本稿では浅川案に従って記述を進める。

引用・参考文献

- 青柳泰介 2003 「大型四面庇付き掘立柱建物について」『考古学に学ぶ (Ⅱ)』同志社大学考古学研究室、京都：pp. 355-366
- 青柳泰介 2012 「豪族居館」『古墳時代研究の現状と課題 下』同成社、東京：pp. 241-268
- 青柳泰介 2013 「③建物の用途と階層性」『古墳時代の考古学 6 人々の暮らしと社会』同成社、東京：pp. 168-180
- 秋山浩三 2007 『弥生大形農耕集落の研究』青木書店、東京
- 浅川滋男 1998a 「太陽にむかう舟—池上曾根遺・大型掘立柱建物の復元—」『奈良国立文化財研究所年報 1998- I』奈良国立文化財研究所、奈良：pp. 18-19
- 浅川滋男 1998b 「「神殿論」に対するコメント」『先史日本の住居とその周辺』同成社、東京：pp. 355-365
- 浅川滋男 2013 「第2節 青谷上寺地遺跡出土建築部材による弥生建物の復元」『建築考古学の実証と復元研究』同成社、東京：pp. 35-93
- 浅川滋男・宮本正崇・中田優人 2018 「第3節 松原田中遺跡の布掘掘形と地中梁に関する復元的考察」『松原田中遺跡Ⅲ』公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室、鳥取：pp. 951-985
- 飯塚武司 2012 「古墳時代の首長居館と祭儀施設」『古代学研究』第193号 古代学研究会、大阪：pp. 1-22
- 家原圭太 2018 「古代都城における小規模宅地の居住施設と居住形態」『古代学研究』第216号 古代学研究会、大阪：pp. 1-12
- 乾 哲也 2001 『よみがえるいずみの高殿—弥生時代大型掘立柱建物と削り抜き井戸の復元—』和泉市教育委員会、大阪
- 乾 哲也 2022 「大型掘立柱建物の復元—井上論文に対して—」『池上曾根遺跡の研究』和泉市史編さん委員会、大阪：pp. 49-64
- 岩崎直也 1991 「弥生時代の建物」『弥生時代の掘立柱建物』第29回埋蔵文化財研究会、滋賀：pp. 79-116
- 植木 久 1991 「高床式建築の変遷」『クラと古代王権』ミネルヴァ書房、東京：pp. 151-172
- 植木 久 2013 「①建物の構造」『古墳時代の考古学 6 人々の暮らしと社会』同成社、東京：pp. 81-94
- 梅本康弘 1997 「中海道遺跡(3NNANK-32 地区)～中海道遺跡北東部～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』44 (財)向日市埋蔵文化財センター、京都：pp. 115-185
- 大木 要 2007 「弥生時代における掘立柱建物の導入と展開—河内湖周辺地域を中心として」『古代学研究』第178号 古代学研究会、大阪：pp. 22-38
- 岡田英男 1991 「棟持柱をもつ掘立柱建物の構造復元」『文化財学報』第9集、奈良大学、奈良：

pp. 1-16

- 岸本道昭 1998「掘立柱建物からみた弥生集落と首長—兵庫県と周辺の事例から—」『考古学研究』第44巻第4号 考古学研究会、岡山：pp. 81-91
- 楠 正勝 1995「まとめ」『金沢市南新保D遺跡Ⅱ』金沢市・金沢市教育委員会、石川：pp. 81-103
- 久住猛男 2006「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」『弥生の大型建物とその展開』サンライズ出版、滋賀：pp. 145-192
- 口野博史編 2001『松野遺跡発掘調査報告書 第3～7次調査』神戸市教育委員会、兵庫
- 黒田隆二 2006「極楽寺ヒビキ遺跡大型掘立柱建物（建物1）の復元とその諸問題」『考古学論攷』29、奈良県立橿原考古学研究所、奈良：pp. 97-110
- 黒田龍二 2012『纏向から伊勢・出雲へ』学生社、東京
- 小島敦子 2021「(3) 古墳時代の建物について」『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団、群馬：pp. 259-271
- 三宮昌弘 1999「考察1、尺度遺跡庄内期集落の分析」『尺度遺跡Ⅰ、(財)大阪府文化財センター、大阪：pp. 236-268
- 設楽博己 2009「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集、国立歴史民俗博物館、千葉：pp. 55-90
- 高田健一 2010「古墳時代集落と掘立柱建物」『出雲大社の建築考古学』同成社、東京：pp. 49-73
- 高橋浩二 2018「布掘り柱掘形をもつ掘立柱建物の基礎的研究—北陸を中心に—」『待兼山考古学論叢』Ⅲ、大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 183-197
- 武末純一 1998「北部九州の大型掘立柱建物—集落のなかで—」『先史日本の住居とその周辺』同成社、東京：pp. 303-325
- 辰巳和弘 2004「中央氏族の本拠とその構造」『季刊考古学』別冊14 雄山閣、東京：pp. 87-95
- 辰巳和弘 2006「古墳時代の『居館』と大型建物」『弥生の大型建物とその展開』サンライズ出版、滋賀：pp. 193-216
- 田中 裕 2024「古墳時代前期の列島東部と「豪族居館」—交換のための実利を伴う儀礼・祭祀という観点から—」『日本考古学の論点』下 雄山閣、東京：pp. 43-50
- 寺沢 薫 1998a「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店、東京：pp. 103-162
- 寺沢 薫 1998b「古墳時代の首長居館」『古代学研究』第141号 古代学研究会、大阪：pp. 1-21
- 寺沢 薫 2002「首長居館論追補～八王子遺跡の古墳時代前期初頭遺構に寄せて～」『八王子遺跡』財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、愛知：pp. 85-96
- 寺沢 薫 2018「第2章 環濠集落の内的発展と首長層の成長」『弥生時代政治史研究 弥生時代国家形成史論』吉川弘文館、東京：pp. 38-124
- 鳥取環境大学浅川研究室 2010「纏向遺跡大型建物の復元—青谷上寺地建築部材による応用研究—」『出雲大社の建築考古学』同成社、東京：pp. 547-578
- 禰亘田佳男 2019『農耕文化の形成と近畿弥生社会』同成社、東京
- 禰亘田佳男 2024「独立棟持柱建物と近畿弥生社会」『紀元一世紀の社会変革—弥生後期のはじまり

- をさぐる一』大阪府立弥生文化博物館、大阪：pp. 86-101
- 橋本輝彦 2013「④豪族居館と大王の宮」『古墳時代の考古学 6 人々の暮らしと社会』同成社、東京：pp. 116-129
- 坂 靖 1998「古墳時代の階層別にみた居宅」『古代学研究』第 141 号 古代学研究会、大阪：pp. 22-35
- 坂 靖 2009「豪族居館・集落研究の現状と課題」『季刊考古学』第 106 号 雄山閣、東京：pp. 74-78
- 日高 慎 2020「王権継承の場を考古学から考える」『史境』79・80 歴史人類学会、茨城：pp. 59-80
- 広瀬和雄 1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 22 集 国立歴史民俗博物館、千葉：pp. 29-110
- 広瀬和雄 1998「クラから神殿へ」『先史日本の住居とその周辺』同成社、東京：pp. 326-351
- 三木 弘 2011「古墳出現前夜の首長と共同体」『古墳社会と地域社会』学生社、東京：pp. 29-83
- 見須俊介 1997a「古墳時代の「豪族居館」研究上における問題点と平面類型」『考古学論攷』第 20 冊 奈良県立橿原考古学研究所、奈良：pp. 58-78
- 見須俊介 1997b「7～8 世紀における豪族の居宅の動向と律令期遺跡との関係」『立命館大学考古学論集』I 同刊行会、京都：pp. 301-309
- 宮本長二郎 1991「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』第 29 回埋蔵文化財研究会、滋賀：pp. 33-54
- 宮本長二郎 1996『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版、東京
- 森岡秀人 2006「大型建物と方形区画の動きから見た近畿地方の様相」『弥生大型建物とその展開』サンライズ出版、滋賀：pp. 115-144
- 山岸常人 2008「極楽寺ヒビキ遺跡大型掘立柱建物の再検討」『王権と武器と信仰』同成社、東京：pp. 206-215
- 山下優介 2015「弥生・古墳時代の独立棟持柱建物に関する考察」『先史学・考古学研究』第 26 号 筑波大学、茨城：pp. 23-47
- 山中敏史 2007『古代官衙の造営技術に関する考古学的研究』平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書 奈良文化財研究所、奈良
- 吉識雅仁 2008「掘立柱建物の検討」『柿坪遺跡』兵庫県立考古博物館、兵庫：pp. 199-219
- 米川仁一 2015「古墳時代前期の方形区画施設について」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』河上邦彦先生古稀記念会、京都：pp. 607-623
- 米川仁一 2018「古墳時代前期の方形区画施設における「祭祀空間」について」『泉森皎先生喜寿記念論集』泉森皎先生喜寿記念会、福岡：pp. 133-146
- 李 陽浩 2008「建築技法からみた原始～古代日本における大型建物の諸相」『日韓集落の研究―生産遺跡と集落遺跡―』日韓集落研究会、福岡：pp. 9-56
- 若林弘子 1986『高床式建物の源流』弘文堂、東京
- ※紙幅の都合上、遺跡報告書については省略せざるを得なかったため、詳細は寺沢 1998b・2018 等を参照されたい。また図 1～図 3 は、図中に記した文献および遺跡報告書にもとづき筆者が作成した。